

## 雲南省の少数民族政策の印象

文学部 鐘ヶ江 晴彦

私にとって雲南は、まったく予備知識なしに飛び込んだ異境であった。

旅行、特に海外旅行をするときに、私は、ガイドブックの1・2冊も買い、観光名所、気候、通貨、交通・通信などは言うまでもなく、地元の名物料理と有名レストランをしっかりとチェックしてから出かけるのを常としているが、今回ばかりは、何の準備もできなかった。行政から委託された大規模な調査の報告書づくりに時間をとられ、事前の研究会に出席できなかったばかりか、徹夜して明け方5時にA4版200ページ超の原稿を書き上げ、それから荷造りをして6時に出発する、という状態だったからである。

それだけに、上海から飛行機を乗り継ぎ、ようやく着いた麗江で最初に訪れた、麗江古城の印象は強烈であった。特に、昔ながらと思える独特のたたずまいの住宅や店と、道端にしゃがみ込んでおしゃべりをしている民族衣装(ナシ族)の女性たち、そして何よりも東巴文字に、私はすっかり魅せられてしまった。めったやたらにシャッターを押し、東巴文字の判子を作り、翌日訪れた東巴博物館では、“東巴先生”の書と『納西象形文字実用詞注釈』(1640の東巴文字を分類・説明したもの)を買ってしまった。その判子には、金属板に撥が当たっている形の文字(『納西象形文字実用詞注釈』で調べると、これは銅鑼を意味する文字で、東巴文字には鐘に当たるものは無いらしい)と、独特な形の「水」(泉から湧き出している形?)が流れていることを示す文字とが彫ってある。何を示しているか分かりやすい上、丸みがあるため、ユーモラスでかわいいのが東巴文字なのである。

雲南の少数民族についての学習の、昆明でのハイライトは、雲南大学における陸偉東先生のレクチャーと、「雲南大学跨世紀雲南民族調査」報告展示の見学であった。陸先生の報告は、雲南省の少数民族の概要と由来、少数民族の言葉、文字、住居、服装、婚姻、葬儀、祭りなどについての、豊富なフィードワークを踏まえた具体的な説明であり、流暢な日本語による、歌あり踊りありの楽しく分かりやすいものであった。後でお聞きしたところ、先生は日本語をすべて中国国内で学ばれたとのことで、アメリカに1年滞在しても帰国すればじきに英語が使えなくなってしまう我が身が恥ずかしくなった。

「雲南民族調査」の報告展示は、建物は決して立派なものではないが、25の少数民族それぞれについて写真と説明のパネルが設置された、なかなか見応えのあるものだった。私は、そのすべてを一々デジカメに撮ったが、後で調査報告写真集を購入することができたため、それは殆ど無駄な作業となってしまった。

雲南省における少数民族の処遇と研究についての、今回の調査旅行を通して得た印象は、観光資源化が進んでおり、民俗学的研究に偏っているのではないかと、いうものであった。民族衣装を着た有料の写真モデルは論外であるが、雲南民族村・民族博物館や観光コースとなっている少数民族の集落にも、それが色濃く現れていた（もちろん、それぞれ楽しく見学させてもらったが）。私の関心は、少数民族の人たち、とりわけ若い世代のアイデンティティや文化継承の意欲、雲南省における少数民族の政治・経済的地位、国家や省の少数民族政策の実態などであるが、それらを知ることは、必ずしも十分にはできなかった。

ただ、公式行事の通訳だけでなく細々とお世話くださった経済学研究科院生の施錦芳さんや、昆明でのガイドの宋東昇さんとの話し（その殆どは、私があれこれと質問し、答えてもらうというもの）を通して、上記のような関心事について、若干ではあるが知ることができた（ここに、改めて、お二人に対する心からの感謝の意を表したい）。

その限りではあるが、中国の少数民族政策は、国家的統合の維持という政治的側面が強く、経済的優遇策はそれなりに行なわれているが、社会・文化的側面が弱いという印象を受けた。漢民族文化への同化圧力が強く働いている中で、若い人たちが民族文化を継承し民族的アイデンティティを確立することを、国や省は本気で推進しようとしているのかどうか、特に、高等教育を受け都市で生活している少数民族の若者をどのように位置づけるつもりなのか、そもそも本格的な多文化主義社会を指向するのか否か、そのような点がはっきりしていないという印象である。中国が、とりわけ雲南省が、今後どのような民族政策を取り、どのような社会を築いてゆくのかが、注意深く見守ってゆきたい。